

国立国語研究所学術情報リポジトリ

複合語のタイポロジーと日本語の特質：「日本語は特殊でない」というけれど

著者	影山 太郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	1
ページ	5-27
発行年	2010-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000553

複合語のタイポロジーと日本語の特質

—「日本語は特殊でない」というけれど—

Typology of Compounds and the Uniqueness of Japanese

影山 太郎 (Taro Kageyama)

国立国語研究所長 (Director-General, NINJAL)

《要旨》世界諸言語の中で日本語は特殊なのか、特殊でないのか。生成文法や言語類型論の初期には人間言語の普遍性に重点が置かれたため、語順などのマクロパラメータによって日本語は「特殊でない」とされた。しかし個々の言語現象をミクロに見ていくと、日本語独自の「特質」が明らかになってくる。本稿では、世界的に見て日本語に特有ないし特徴的と考えられる複合語（新しいタイプの外心複合語、動作主複合語など）の現象を中国語、韓国語の対応表現とも比較しながら概観する。

Abstract: Is Japanese unique among the world's languages, or is it not? While early typological studies stressing the universality of human languages showed that Japanese is not a “special” but a rather common type of language in terms of word order and other macro-parameters, more recent probes into the fine details of Japanese are beginning to uncover theoretically challenging phenomena that are unique to or characteristic of this language. The present paper introduces some such phenomena related to Japanese word formation including exocentric compounds of a novel type and agent-incorporating compounds, and elucidates their unique nature by comparing them with the counterparts in Chinese and Korean.

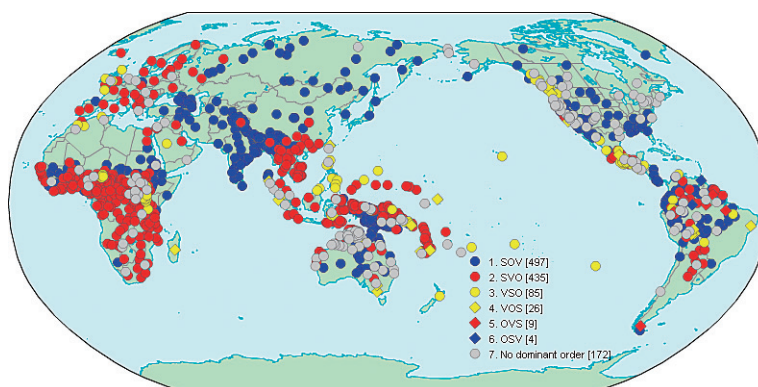
1. 世界諸言語の中の日本語：日本語が特殊でない場合

おそらくどの言語についても言えることだと思われるが、話者は自分の母語について「他の言語と比べて特別だ」、「自分の言語は難しい」と思い込む傾向があるようである。自分の言いたいことをピタリと言い表す言葉が見つからないときや、自分の言った言葉が相手に誤解されてしまったときなど、「ああ、日本語って難しい。」と嘆息しがちである。このようなことは日本語に限らず、どの言語でも起こるが、それは個人の表現力の問題であって、当該言語そのものの性質に起因するのではない。このような事例は別にしても、特に日本語の場合は、歴史的系統が未だに不明であり、日本人の人類学的なルーツも諸説があるという状況であるから、外国語に馴染みがなく、日本語というものを分析的に捉えたことのない一般人が「日本語は特殊な言語である」という観念を抱いたとしても無理のないことである。

しかし、1960年代から始まった生成文法が人間言語の普遍性を強調し、1960年代後半から本格的に開始され、WALS (*The World Atlas of Language Structures*, edited by Haspelmath,

Dryer, Gil, and Comrie, 2005) に代表される今日の成果につながった言語類型論 (language typology) の研究が地球上の諸言語の特徴を調査し類型化していく中で、「世界的な観点からすると、日本語は決して特殊ではなく、むしろごく普通の、ありふれたタイプの言語である。」という見解が有力になってきた (柴谷 1981, 影山 1985, 角田 1991/2009)。そのような見解を生み出す切っ掛けとなったのは、文を構成する単語の語順に関する類型論的研究である。これについては既によく知られているので、ここでは要点だけを述べる。S (主語), O (目的語), V (動詞) という 3 要素で構成される典型的な他動詞文の場合, S, O, V の配列は理論上, SOV, SVO, VSO, VOS, OVS, OSV という 6 通りの組み合わせが可能である。しかし実際には、それらは均等に 6 分の 1 ずつ分布しているのではなく、概略、次のような大きな差異がある。(1) にWALSの言語地図, (2) にはタイプごとの数値を示す。(2) の数値はWALSに依るが、ここでは、優勢な語順を 1 つのタイプに定められない語順不定の言語は除外し、母数を1056言語として数えている (数値はGreenberg 1966, Hawkins 1983, 山本 2003など、研究者によって多少異なりがある)。

(1)



(Map from WALS, 81. Order of Subject, Object and Verb [by Matthew S. Dryer])

- (2) **SOV** — 1056言語中497言語 (約47.1%) : 日本語, 朝鮮語, ヒンディ語, エスキモー語, ケチュア語など
- SVO** — 1056言語中435言語 (約41.2%) : 英語, ロシア語, スワヒリ語, 中国語, インドネシア語など
- VSO** — 1056言語中85言語 (約 8 %) : ウェールズ語, サモア語, ヘブライ語, ネズ・パース語など
- VOS** — 1056言語中26言語 (約2.4%) : マダガスカル島のマラガシ語, ネイティブ・アメリカン語の一部
- OVS** — 1056言語中 9 言語 (約0.9%) : ブラジル, オーストラリアなど
- OSV** — 1056言語中 4 言語 (約0.4%) : アマゾン流域, オセアニアなど

この中で日本語は、調査対象となった言語の約47.1%を占めるSOVグループに属する。したがって、S, O, Vの語順に関しては「日本語は特殊どころか、ごく普通の言語である」

という主張が成り立つ。

更に、語順の類型論研究によって、OとVの順序は、主動詞と助動詞、名詞と修飾語、名詞と格表示（格助詞、前置詞）といった様々な要素の配列順序とかなりの程度に相関することが明らかになった。たとえば、OVという語順を持つ言語は「テーブルの脚」のように所有者＋名詞の語順になる傾向が強く、同時に、「自動車で」のように名詞＋格助詞という語順になることが多い。逆に、VOという語順を持つ言語は、the legs of the tableのように名詞＋所有者という語順になる場合が多く、同時に、by carのように前置詞＋名詞の語順になることが多い。このように、「AならばB（A⊃B）」という関係を「含意関係」と言い、その関係が言語の普遍的傾向として成立する場合を「含意的普遍性」と呼ぶ。語順については、概略、(2) のような含意的普遍性が成り立つことが言語学の共通理解となっている。

(3) 含意的普遍性

- a. OV⊃後置詞, OV⊃所有者＋名詞, OV⊃関係節＋名詞, OV⊃動詞＋助動詞
- b. VO⊃前置詞, VO⊃名詞＋所有者, VO⊃名詞＋関係節, VO⊃助動詞＋動詞

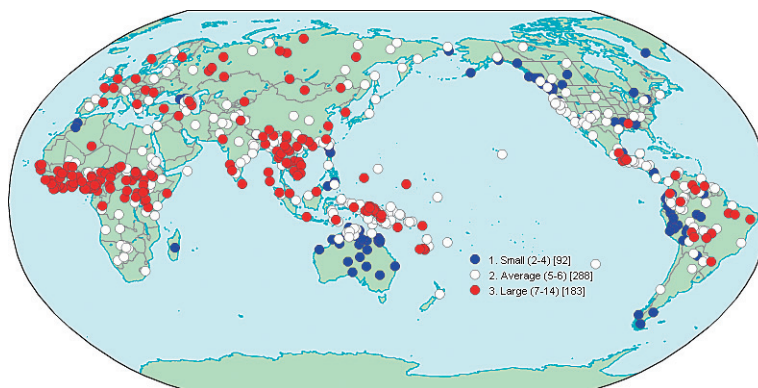
この語順の含意的普遍性においても日本語はOV型言語の典型である(3a)にみごとに適合し、その点でも、日本語はごく普通の、自然な言語であると言える。

ここで生じる疑問は、語順に関して日本語が「メジャー」なグループに属するのが、単なる偶然なのか、それとも何らかの合理的な原理に基づく当然の帰結なのかという点である。(3) のような含意関係が統計的に有意な度合いで成立することは、偶然とは見なしにくい。「誰が」と「何を」を先に述べ、それがどうなったかを表す動詞を文の最後に持ってくることは文の理解において極めて自然であり、また、主要部(V)と依存部(O)の意味的關係を名詞と修飾語や名詞と格表示との主要部-依存部の関係にも一貫させることは知覚に際しての脳の負担の軽減につながる。このように、日本語に見られる文中および名詞句内の語順は、意味理解と知覚という心理学的な裏付けがあると考えられる(Hawkins 1994等を参照)。

では、音声はどうだろうか。母音数の分布をWALSで調べると、(4) のようになる。

- (4) 少母音（2～4母音） — 563言語中92言語（約16.3%）：アレウト語、ナヴァホ語、ジルバル語、マダガスカル語、グリーンランド語など
- 平均的（5～6母音） — 563言語中288言語（約51.2%）：日本語、アイヌ語、アラビア語、スペイン語、ロシア語、バスク語、ブルガリア語、チャモロ語など
- 多母音（7～14母音） — 563言語中183言語（約32.5%）：韓国語、フランス語、ハンガリー語、英語、ジャワ語、クメール語など

(5)



(Map from WALS, 2. Vowel Quality Inventories [by Ian Maddieson])

(4) に示されるように、日本語の5母音体系は「平均的」なグループに属し、調査対象となった言語の約51.2%を占める。ここでもまた、日本語は特殊どころか、ごく普通のタイプの言語であるということが分かる。

母音（および子音）の数は意味の弁別につながると考えられる。母音を少なくして意味の弁別を高めるためには子音を増やさなければならない。しかし子音を増やすということは唇、歯、舌、口蓋、鼻腔など様々な発声器官を複雑に駆使しなければならないということであり、エネルギーの負担が大きくなる。逆に母音を多くしても、唇の形や口の開き方を工夫しなければならず、それも生理学的に負担になる。その点で、日本語の発音は非常に合理的で、「楽をしている」と言える。実際、日本語は母音数が平均的であるだけでなく、子音の数においても「(他言語と比べて) 適度に少ない」(WALS, 1. Consonant Inventories)。

日本語の発音が「自然なタイプ」であるという理解は、単に母音の数だけではなく、母音のクオリティからも裏付けられる。すなわち、現代日本語の母音は「ア、イ、ウ、エ、オ」であるが、これら5つの音声は口腔の全体を使って作られ、口の開き具合および舌の前後位置において5母音相互の距離が最大限に取られている。同じく5つの母音であっても、もし仮に [i], [y], [e], [ø], [ɛ] であったなら、産出と理解の両面において極めて不自然な言語であると言わざるを得ないだろう。

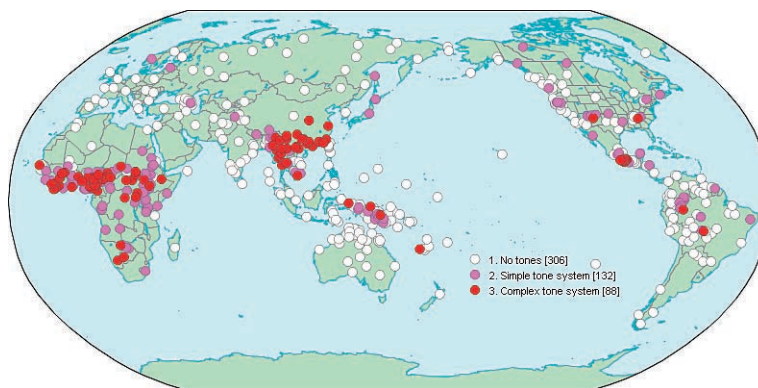
日本語の発音がごく普通のタイプであることは、母音、子音の数だけに留まらない。日本語は単語の内部での高低アクセントによって意味を区別する。日本語の高低アクセントはモーラ単位で起こり、1つのモーラの中で高低が変化することは一般にない。WALS (13. Tone) では、一音節の中で高低の変化がない音調を「単純音調」、中国語の四声のように一音節の内部で上下の変化がある音調を「複雑音調」と呼び、その分布を (6) のように示している。

(6) 音調なし — 306言語 (英語、ドイツ語のように強弱アクセントの言語も含む)

単純音調 — 132言語 (日本語、アイヌ語、ナヴァホ語、ノルウェー語など)

複雑音調 — 88言語 (中国語、ベトナム語、ヨルバ語など)

(7)



(Map from WALS, 13. Tone [by Ian Maddieson])

単純音調と複雑音調を合わせた220言語のうち、単純音調は60%に達し、ここでもまた日本語は「多数派で、ごく普通の言語」であるということになる。

1つのモーラないし音節の内部で音調を変化させる複雑音調のシステムは、単純音調と比べると、発話においても聴覚理解においても明らかに困難を伴う。したがって、単純音調の言語が多数を占めることは極めて自然な結果であると言える。

●まとめ 本節では、文法および発音の基本的要素について日本語が特殊かどうかを検証した。その結果、少なくともこれらの現象に関する限りでは、日本語は通俗的に考えられているように「特殊」なのではなく、むしろ逆に、ごく普通の、ありふれたタイプの言語であることが分かる。しかも、その「ごく普通で、ありふれている」という性質は、決して偶然の産物ではなく、知覚・理解・発話といった人間の心理的・生理的制約に即した極めて自然な結果であると言える。更に、日本語がこのような「中庸」の、すなわち「極端でない」性質を備えていることは、関係詞形成における名詞句接近可能性の階層 (Keenan and Comrie 1977) や形容詞結果述語を含む結果構文の形成における含意的階層 (影山 2009c)、あるいは外界認識における視座 (影山 1996, 2002) など、言語の骨格部分全体にわたって観察される。

日本語をごくありふれたタイプにする要素は、言語の骨格を構成し、それなしでは言語が機能しないような要素である。これらは、認知的・生理的・生物学的基盤に依拠する要素であり、「自然さ、普通さ」を説明するための合理的な理由になり得る。しかしながら、それら言語の基盤的な部分から外れて、もっと細部に立ち入るなら、日本語は決して普通ではなく、むしろ独自で、特殊であると考えられる部分が多数発見される。次節からは、そのように日本語がむしろ独特であると思われる現象を形態論の複合語形成の中から拾い上げて整理してみる。

2. 複合語のタイポロジー：日本語が特殊な場合 (I)

これ以降は、日本語が特殊である（あるいは世界的に珍しい）と考えられる幾つかの事

例を複合語という領域から提示する。まず本節では、主要部の位置に関わる事例を挙げる。

主要部 (head) とは単語全体の範疇 (並びに多くの場合、意味も) を決定する要素で、その位置によって4つのタイプに類型化される (Kageyama 2009a)。

(8) a. 右側主要部 (依存部 + 主要部) : 日本語の基本的パターン

V-N ゆで卵, A-N なま卵, N-N 温泉卵 / N-A 腹黒い, V-A 蒸し暑い, A-A 細長い

b. 左側主要部 (主要部 + 依存部) : 中国語に影響された表現で、「洗車」のような二字漢語に限定される。

V-N 洗車, 読書 (Adv-V 「水洗, 乱読」では右側主要部になる)

c. 両側主要部 (等位複合語とも言う。主要部 + 主要部)

親子, 国公立, 上げ下げ

d. 主要部なし構造 (外心複合語)

この中で、複合語の内部に主要部が認定されるものは内心複合語 (endocentric compounds), 複合語の内部に主要部を持たないものは外心複合語 (exocentric compounds) と呼ばれる。Scalise, Fábregas, and Forza (2009) は複合語の包括的な分類を目指し、主要部の概念を範疇の主要部、意味の主要部、文法特性の主要部という3つのパラメータに分けることによって世界諸言語の複合語の類型化を提示しているが、特に問題になるのは外心複合語である。

従来、複合語に関する研究はほとんどが内心複合語に限られてきた。それは、内部に主要部を備えているのが言語としては自然な姿であり、生産性も高いからである。他方、外心複合語に関する研究はすべてと言ってもよいほど、メトニミーないしメタファーによる「名付け」に限定されてきた。

(9) 伝統的に論じられてきたタイプの外心複合語

a. メタファーに基づく例

stag party 「男だけのパーティ」, *belly button* 「へそ」, *beanpole* 「ひょろ長い人」
(以上の英語例はBenczes 2006), *five-finger* 「ひとで」, 鳥肌, 膝枕, 木偶の坊
(Kageyama, in press)

b. メトニミーに基づく例

redcap, *bullhead* 「頑固者」, *pickpocket*
espantapájaros 'scares+birds' = かかし (スペイン語, Kornfeld 2009)
sans papier 'without + passport' = 不法滞在者 (フランス語, Scalise and Bisetto 2009)
赤帽, (お) 遍路 (さん), 朝飯前, 二本差し, 肩車 (Kageyama, in press)

認知言語学の観点から英語におけるこの種の複合語を包括的に論じたBenczes (2006) は、いわゆる外心複合語と呼ばれるものはすべてメタファーないしメトニミーによって動機づけられると分析している。実際、日本語でも、メタファーないしメトニミーによる外心複

合語は(9)に例示したように豊富に見られる。

しかしながら、日本語を詳しく見ていくと、メタファー、メトニミーが関与しない外心複合語が発見される(影山 2009b; Kageyama, in press)。(10)の例を見てみよう。

(10) 両側依存部構造

- a. 太っ腹(な)／*腹な, *太な
- b. 悪趣味(な)／*趣味な, *悪(あく)な
- c. 強気(な)／*気な, *強な
- d. 大柄(な)／*柄な, *大(おお)な
- e. 無責任(な)／*責任な, *無な
- f. 多機能(な)／*機能な, *多な
- g. 大仕掛け(な), 大柄(な), 甘口(な), 無愛想(な), 非常識(な), 高品質(な), 低価格(な), 小規模(な)

これらの単語は、全体で「～な」と活用することから、単純な名詞ではなく形容名詞—形容詞的名詞(影山 1993); 国語学の用語では「形容動詞」—であることが明らかである。ところが、この単語全体の範疇は、そのいずれの構成要素からも直接的には導き出すことができない。たとえば、「太っ腹(な)」は「太っ腹」全体で始めて形容名詞として機能するのであって、前部分だけ取って「*太な」とも、後ろ部分だけ取って「*(っ)腹な」とも言うことはできない。したがって、「太っ腹」では前要素「太」も、後ろ要素「(っ)腹」も主要部(すなわちそれだけで全体の範疇を決定する要素)としての資格を有さないことになる。言い換えると、これらは内部に主要部を持たないから、外心複合語と見なさなければならない。(10b)以下の例も同様である。主要部でない要素を「依存部」とすると、「太っ腹」タイプの単語は定義上、「依存部+依存部」という構成を有する特異な構造であるということになる。

(10)のような例は、一見したところ、後ろ側が主要部であるように思えるかも知れないが、実はそうではない。そのことは、実際に後ろ要素が主要部である類似の名詞と比較すると明らかになる。たとえば、「ビール腹」は身体の一部としての「腹」を表しているから、「90cm」のように胴回りを測ることができるが(11a)、「太っ腹」は物理的に身体部位を表すわけではないから、そのような測定ができない(11b)。

- (11) a. 90センチ以上のビール腹
b. *90センチ以上の太っ腹

また、通常、同じ範疇、同じ意味カテゴリーの単語は(12a)のように並列したり対比したりすることができる。これと対照的に、「ビール腹」と「太っ腹」を対比させるのは不適切で、(12b)のように言葉遊びないし冗談になってしまう。

- (12) a. 部長さんはビール腹だ。いや、あれは太鼓腹と言うべきだよ。
b. #部長さんはビール腹だ。いや、あれは太っ腹と言うべきだよ。

同様な例として (13) を見てみよう。

- (13) a. 色鉛筆で花柄を描いた。
b. *色鉛筆で大柄を描いた。

「花柄」は実際に花の形をしているから、「花柄を描く」(13a) というのは適格である。なぜなら、「描く」の選択制限に対して「花柄」が適合しているからである。これに対して、「大柄」は物理的に特定の物体を指すわけではないから、「*大柄を描く」(13b) というのは「描く」の選択制限を満たしておらず、不適格と判断される。

このように、(10) に例示した合成語は、それを構成するいずれの要素も主要部と見なすことはできない。(10) の例の中には、複合語と呼ぶより、接頭辞を伴う派生語と見なすほうが適切ではないかと思われる例もあるが、ここでは複合・派生の区別には立ち入らない。重要なのは、(10) の例はいずれも、見かけは前要素が後ろ要素を修飾する関係 (modification relation) になっているが、意味解釈上は前要素と後ろ要素を逆転させた「叙述関係 (predication relation)」として解釈できるという点である。たとえば「太っ腹だ」は「腹が太い」と言い換えられる。

- | (14) | 修飾関係 | | 叙述関係 |
|------|---------------|---|-------------------------|
| a. | あの人は太っ腹だ。 | = | あの人は腹が太い。 |
| b. | あの人は悪趣味だ。 | = | あの人は趣味が悪い。 |
| c. | このプリンターは多機能だ。 | = | このプリンターは機能が <u>多い</u> 。 |
| d. | あの人は無責任だ。 | = | あの人は責任感が <u>無い</u> 。 |

(14) の言い換えが適切に成立するのに対して、普通の複合語はそのような言い換えができないことに注意したい。

- (15) あの人はビール腹だ。 ≠ *あの人は腹がビールだ。

以上をまとめると、「太っ腹」や「多機能」のような合成語はその中に主要部を持たない。従来、主要部を持たない複合語として論じられてきたのは「赤帽」タイプのメタファー・メトニミー複合語であるが、「太っ腹」タイプは明らかにそこには属さない。Scalise and Bisetto (2009), Scalise, Fábregas, and Forza (2009) は主要部による複合語の類型を提案しているが、日本語の「太っ腹」タイプの「依存部+依存部」構造はそのいずれの類型にも該当しない新しい構造である。このタイプの例は、これまでどの言語においても報告されていないことからすると、日本語独自の「特殊」な構造であると捉えてよいだろう。

その特殊性は何に由来するのだろうか。そこには2つの要因が関与している。1つは意味の解釈である。上掲(14)のように、「太っ腹」タイプの表現は見かけ上は、前要素が後ろの名詞を修飾するという名詞修飾構造を取っているが、意味解釈では順番が逆転し、「後ろの名詞(主語)が、前要素(述語)だ」という叙述関係に理解される。ここでは形と意味のねじれ(ミスマッチ)が起こっている。言語の意味と形は一対一に対応するのが理想的だとすると、このようなミスマッチはそれ自体で特殊で特異な現象であると言える。

もう1つは形容名詞という範疇が関わっていることである。「太っ腹」のような複合語が日本語に存在するのは、形容名詞という特別な文法範疇が存在するからであると考えられる。形容名詞は名詞的な性質と形容詞的な性質を併せ持った混合範疇(ハイブリッド・カテゴリー)である(詳しくは影山1993)。「太っ腹」タイプの語は、見かけは後ろ側に名詞を持つ名詞修飾構造であるが、意味解釈では「腹が太い」という叙述関係であり、しかも、述語に当たるのは「太い」のような形容詞的な概念である。そこで、「太っ腹」が全体として形容名詞という範疇を担うのは、後ろ部分「腹」の名詞としての機能と、前部分「太」の形容詞としての機能が合わさったためではないかと推測できる。すなわち、「太っ腹」タイプの単語が可能になるのは、形式と意味のミスマッチを伴うだけに留まらず、文法範疇として、前部分の形容詞性と後ろ部分の名詞性を兼ね備えたハイブリッド・カテゴリーが当該言語で利用可能であることが条件となる。

このことから導き出される予測の1つは、「形容詞+名詞」という組み合わせ以外でも、しかるべきハイブリッド・カテゴリーがあれば、同じような意味と形式のミスマッチが生じることができるということである。この予測は次のような例には的中している。

- | (16) | 修飾関係 | | 叙述関係 |
|------|----------|---|------------|
| a. | 立て膝(を) | = | 膝を立てる |
| b. | 忘れもの(を) | = | ものを忘れる |
| c. | 突き指(を) | = | 指を突く |
| d. | 落としもの(を) | = | ものを落とす |
| e. | 入れ知恵(を) | = | 知恵を入れる／つける |

たとえば「立て膝」は形式上は「動詞+名詞」の構造を取っているが、意味解釈上は「立てている膝」ではなく、「膝を立てる動作」を表すというミスマッチが見られるわけである。

以上概略した「太っ腹」タイプの複合語の分析は、従来、形態論の理論研究で想定されてきた主要部の概念、および内心複合語と外心複合語の区別に対して全く新しいタイプの形態構造を導入するものであり、主要部に関する理論に新しい切り口を示すことができる(理論的考察の詳細はKageyama, in press)。

上記の分析から導き出されるもう1つの予測は、他の言語であっても、形と意味のミスマッチを解消できるようなハイブリッド・カテゴリーが存在すれば、日本語の「太っ腹」のような主要部なしの複合語が可能である、ということである。この点の証明は、今後、

諸言語の研究に委ねるしかない。

しかしここで注目しておきたいのは、同じような修飾関係と叙述関係の反転が複合語以外にも見られるということである。とりわけ (17) のような構文が示唆的である。

- (17) 修飾関係 主述関係
- a. ジョーンズ先生は青い目をしている。 = ジョーンズ先生は目が青い。
- b. 彼女は細い指をしている。 = 彼女は指が細い。
- (18) a. *ジョーンズ先生は近ごろ青い目をしている。
- b. *彼女は今だけ細い指をしている。

影山 (2004) で詳しく論じたように、この「青い目をしている」構文は主語 (人間) の身体的属性を表し、そのため、「今だけ」や「近ごろ」といった短期間の継続を表す時間副詞 (18) とは相容れない。このように主語の「属性」を叙述する場合だけ、「青い目」を「目が青い」のように、名詞修飾構造を叙述構造で言い換えることが可能である。「～をしている」という形式は、主語の恒常的な属性を表す場合だけに限られず、「ふくれっ面をしている」のように一時的な状態や動作を表す場合にも用いられるが、一時的な場合は名詞修飾から主述関係への反転が起こらない。

- (19) a. 彼は近ごろふくれっ面をしている。
- *彼は面がふくれだ／ふくれている。
- b. 子供はその時だけ泣き顔をしていた。
- *子供は顔が泣きだった／泣いていた。

先ほどの「太っ腹」や「悪趣味」などの形容名詞も主語の恒常的な属性を表すから、形容詞的表現に関しては属性叙述という性質が何らかの作用をしているのではないかと推測することができる (属性叙述の文法的な特異性については影山 2009d)。

このように、「太っ腹」タイプの複合語と「青い目をしている」構文は表面上の形式と実質的な意味解釈が逆転現象を起こす希少な事例であると言える。従来の、形と意味を一緒に表示する理論では、このようなミスマッチを説明することが極めて困難であり、この現象の本質を捉えるためには、形態構造と意味構造を分離し、しかも同時に両者の構造に言及することを許す理論が必要となる。これは Jackendoff (1997, 2009) などでパラレル表示モデルと呼ばれるもので、類似の主張はオランダ語を分析した Ackema and Neeleman (2004) でも展開されている。本節で取り上げた現象はこの考え方が日本語でも実証されることを示している (詳しくは Kageyama, in press)。

●まとめ 本節では、日本語が「特殊」であるということを示す例として、「太っ腹」タイプの表現を考察した。このタイプは、形態上の主要部を欠くものの、叙述関係という確固たる意味構造によって支えられており、しかも、その形式と意味のミスマッチが形容名詞のようなハイブリッド・カテゴリーによって解消されるという点が特徴である。日本語

は基本的に「右側主要部」であるにもかかわらず、その原則から逸脱して「太っ腹」のような主要部なしの構造を許すというのは、日本語に特有の曖昧さ（境界の無さ；影山 2002）に由来するのかも知れない。しかし、より重要なことはその意味的な曖昧さを補うハイブリッド・カテゴリーが存在するということであり、これが日本語の特質と見なせるだろう。

3. 語⁺, 統語的複合語, 動作主複合語：日本語が特殊な場合(Ⅱ)

次に、漢語が日本語特有の表現を生み出している例を紹介しよう（本節は影山（印刷中）の骨子をまとめたものである）。日本語の語彙は和語、漢語、洋語、擬態・擬音・擬声語という4種類の語種があるが、日本語本来の和語から飛躍的に語彙力を増強させたのは疑いもなく「漢語」である。和語だけでも、複合過程および派生接辞はある程度の生産力を持つてはいるものの、長く複雑な合成語の形成が可能になったのは、なんと言っても漢語の「造語力」によるところが大きい。(20a)と(20b)を比べてみよう。(20b)および以下の類似例においては、便宜上、音声的な切れ目を「|」で表記している。

- (20) a. 構造, 構造主義, 構造主義的, 構造主義的分析, 構造主義的分析方法
b. 各|国, 同|省, 某|社, 本|書, 前|市長, 前|横浜市長

(20a)と(20b)はどちらも漢語で構成されるが、発音上の相違がある。(20a)では「構造」のように短い単語でも「構造主義的分析方法」のような長い単語でも、すべて一連のアクセントで発音され、途中で区切れたりアクセントが下がったりすることはない。もちろん、ある程度以上長い単語になると、適当な意味のまとまりをプロソディのまとまりとして発音するのが普通であるが、それは意味の理解を保つためという知覚上の理由や、あまり長いと息が続かないという生理的な理由による「言語運用」の現象だと捉えられる。

ところが、(20b)のような漢語表現は長さに関係なく、「|」の部分で心持ち区切れがある。実際、(20b)に上げた例の多くは2文字しかないのに、ポーズを伴っている。しかも、ポーズの他に、アクセントも独特のパターンになっており、単語の先頭の1モーラが高アクセントで、それに続く「|」の後では急にピッチが下がる。この特異なアクセント型は知覚的・生理的な理由ではなく、「各」「同」「某」といった漢語接頭辞が元々備えている語彙的な性質であると考えなければならない。その証拠として、たとえば同じ「同」という漢語であっても、次の2例では異なるアクセント型になり、しかも発音に応じて意味も異なるという事実が指摘できる (Kageyama 2001)。

- (21) a. 1995年1月に阪神大震災が起こり、さらに同|年の3月にはサリン事件が発生した。
b. 私は作家の村上春樹と同学年だ。

休止とピッチ降下を伴う (21a) の「同」は、「前述と同じ」という意味の連体詞的な接頭辞で、前に述べられた1995年を指す照応形として機能し、堅苦しい文体に属する。他方、平板アクセントで発音される (21b) の「同」は「同じ (same)」という意味を表し、日常的な文体でも普通に用いられる。

このような特徴から、(20b) の表現に共通するアクセント型と休止は、文レベルのプロソディではなく「各」などの形態素が持つ語彙的特性として扱うべきであると結論できる。通常、和語の形態素でこのような特徴を持つものはない。また、これは漢語全般に見られる特徴でもない。たとえば、「建設的」という漢語は全体として平板アクセントで発音され、「建設」と「的」の間に休止は観察されない。「的」、「性」、「者」など接尾辞にはこのような音声の特徴は見られないことから、漢語の中でも特定のグループの接頭辞に限られる。また、同じアクセントパターンは一部の複合語にも観察される。

本節では、この特徴的な発音を伴う接頭辞と複合語として、次の3つのタイプの語形成を考察する。いずれも「|」のところで若干の音声的切れ目を伴って発音される。

(22) 「語⁺」という単位の接頭辞 (影山 1993, Kageyama 2001)

- a. 漢語: [前^{ぜん} | 首相]
- b. 和語: *[前^{まえ} | 首相]

(23) 統語的複合語 (Shibatani and Kageyama 1988, 影山 1993)

- a. 漢語: 古書を購入の際は… → [古書 | 購入]の際は…
- b. 和語: 古本を買う際は… → *[古本 | 買う]際は…

(24) 動作主複合語 (影山 2006)

- a. 漢語: [モーツアルト | 作曲]の交響曲
- b. 和語: *[モーツアルト | 作り]の交響曲

「語⁺ (語プラス)」、「統語的複合語」、「動作主複合語」という用語については後でこれらを個別に論じるときに説明するので、ここでは、これらの語形成が「漢語」の特質に基づいていることだけを確認しておこう。

上例でaが漢語 (ゴシック部分) を含んでいるのに対して、bの対応部分は和語になっている。この語種の違いによって、aは適格な日本語であるが、bは不適格であるという明らかな差異が生じている。すなわち、(22), (23), (24) の語形成は漢語が持つ力によって可能になっていると結論できる。

通常、音声的に区切られるのは「句」であるから、(22a), (23a), (24a) の [] 部分も句ではないかと推測されるかも知れない。しかし実際には、これらの [] 部分は「句」ではなく、歴とした「語」を形成することが形態的緊密性 (lexical integrity) のテストによって証明できる。形態的緊密性というのは、単語は全体で1つの塊であり、その内部を統語的な要素で分断することは許されないという性質である。たとえば「前の監督」という句なら、間に「偉大な」を補って「前の偉大な監督」のように表現できる。この場合、「偉大な」は「な」という活用語尾から分かるように、一単語であるが「句」でもある。句

の内部に句を挿入することはできる。ところが、「前 | 監督」に「偉大な」を挿入すると、「*前 | 偉大な監督」となり、非文法的になる。これはすなわち、「前 | 監督」は句ではなく語であり、語の内部に句を入れることは許されないということである。このような観点から (25) を見てみよう。

- (25) a. *[各 | 地方の | 都市]
cf. 各々の地方の都市
b. *[古書 | 神田で | 購入] の際
cf. 古書を神田で購入の際
c. *そのソナタは, [モーツァルト | 一晩で | 作曲] です。
cf. モーツァルトが一晩で作曲した。

いずれも, cf. の表現が文法的であることと比べると, [] 内の表現は非文法的として排除される。

以上の観察から, 「語⁺」という単位の接頭辞, 統語構造における複合語, および動作主複合語は漢語をベースとして成り立つ「語」であることが証明された。

これらが漢語に由来するということからすると, それに対応する表現が元々の中国語にも成立すると想像することは難しくない。しかし本当にそうだろうか。そこで次の問題が提起できる。

●問題

上記3種類の漢語語形成は中国語から借用されたのだろうか, それとも中国語には存在せず日本語で新たに創出されたのだろうか?

この問題に対する解答は, 理論的には次の8つの可能性がある。

	「語 ⁺ 」の接頭辞	統語的複合	動作主複合
可能性A	中国語から借用	中国語から借用	中国語から借用
可能性B	中国語から借用	中国語から借用	日本語で創出
可能性C	中国語から借用	日本語で創出	日本語で創出
可能性D	日本語で創出	中国語から借用	中国語から借用
可能性E	日本語で創出	日本語で創出	中国語から借用
可能性F	日本語で創出	中国語から借用	日本語で創出
可能性G	中国語から借用	日本語で創出	中国語から借用
可能性H	日本語で創出	日本語で創出	日本語で創出

もちろん, 歴史的には中国語から直接日本語に借用されたという可能性のほか, 韓国語を経由して借用されたという可能性も高いが, その歴史的証明は今のところ不可能である。

以下では, これら8つの可能性のうち, 可能性Cが正しいことを, 現代の韓国語とも比

較しながら述べる。

3. 1. 語⁺という形態単位：中国語，日本語，韓国語のすべてに共通

頭高で休止の後にピッチの急降下を伴う漢語接頭辞は決して少なくはない。次のようなものが代表的である。

- (26) 前 | 大統領, 全 | 国立大学, 現 | 会長, 本 | 企画, 非 | 合理的,
各 | 地方, 同 | 教授, 某 | 作家, 旧 | 帝国大学, 故 | 柴田教授

既に述べたように、この特異なアクセント型はこれら接頭辞固有の語彙的性質であると考えられ、しかも、前掲 (21a) の「同」のように文中における照応機能を担うものもある。影山 (1993) およびKageyama (2001) では、これらの接頭辞が「語⁺」という特別の形態単位を形成すると分析している。語⁺は、あくまで語 (word) を形成するが、意味的にも統語的にも「句」に近い振舞いをして、形態構造と統語構造の境界に位置づけられる。

- (27)

形態構造の単位

統語構造の単位

語根 → 語幹 → 語 → 語⁺ …… > 句 → 節 → 文 → 談話

この種の接頭辞はすべて漢語であるが、和語の「元」は例外になる。ただし、「元」と「前 (ぜん)」を比べると、「元」は純然たる接頭辞ではないことが判明する。次の違いを見てみよう。

- (28) a. 前 | 阪神タイガース監督, *前 | [阪神タイガースの監督]
b. 元 | 阪神タイガース監督, 元 | [阪神タイガースの監督]

語の内部に句は介入できないという「形態的緊密性」からすると、「前」(28a) は確かに語を形成している。他方、「元」は (28b) に例示するように句を含むことができるから、純粹な「語⁺」接頭辞と同等に扱うことはできない。そのことは (29) で一層明瞭になる。

- (29) a. *彼は [阪神タイガース監督] だよ, 前。
b. 彼は [阪神タイガース監督] だよ, 元。

「前」は (29a) のように切り離すことが不可能であるのに対して、「元」は (29b) のように単独で生起することができる。したがって、「元」は漢語の「語⁺」接頭辞を模した疑似的接頭辞、あるいは独立した連体詞「元の」の「の」が脱落したものと捉えるのが適切である。

さて、「語⁺」接頭辞と同様のアクセント型は、実は、接頭辞だけでなく、「所属」など

を表すある種の漢語複合語にも観察される。

(30) 「語⁺」複合語

神戸大学 | 学長, 兵庫県 | 北部地方, 文学部 | 唯野教授, 喫茶部 | 営業時間

これは, 「語⁺」接頭辞の音韻特性が複合語にも広がったものと見なすことができる。

以上の前置きを背景として本論に入っていこう。当面の疑問は「語⁺」接頭辞およびそれに準ずる複合語が中国語に存在するかどうかである。

中国語の母語話者に聞くと, 中国語では日本語の「語⁺」接頭辞ほど明瞭な休止は感じられないようであり, また, そもそも中国語では「語」と「句」の区別を見極めるのが難しいようである。しかしそれでも, 次の例では明瞭な違いが確認できた。

(31) 中国語の「語⁺」接頭辞

- a. 该 | 贸易公司 (日本語: 同 | 貿易会社)
*该 | [贸易的公司] (日本語: *同 | [貿易の会社])
- b. 前 | 美国总统 (日本語: 前 | アメリカ大統領)
*前 | [美国的总统] (日本語: *前 | [アメリカの大統領])

(31) の「该」と「前」は日本語の「同」, 「前」に相当すると見なすことができ, しかも, 次に続く部分に句を含めることができないので, 形態的緊密性の条件に適合し, 「語」を形成すると結論づけることができる。

しかしながら, 中国語では「語⁺」のレベルでの複合語は成立しないようである。まず, (32a, b) が歴とした複合語であることを確認しておこう。複合語であるから, (32a', b') のように句を挿入すると非文法的になる。

(32) a. 夏季 | 喫茶部 | 営業時間

- a'. *夏季 | [喫茶部の営業時間]
- b. 神戸大学 | 学長補佐
- b'. *神戸大学 | [学長の補佐]

ところが, (32a) を中国語に訳すと (33a) のようになり, これは内部に句を含むことができる (33b)。

(33) a. 夏季 | 茶社 | 营业时间 cf. (32a)

- b. 夏季 | [茶社的营业时间] cf. (32a')

中国語に関する筆者の調査はまだ不十分であるが, 上記の例だけで判断すると, 中国語には「語⁺」の接頭辞は存在するものの, それに当たる複合語はないということになる。

本稿の直接の目的は漢語語形成の起源であるが、韓国語に類似表現があるかどうか調べてみた。

(34) 韓国語の語⁺接頭辞

- a. 전 | 미국 대통령
cen | mikwuk taythonglyeng
前 | アメリカ大統領
- b. ?* 전 | [미국의 대통령]
?* cen | mikwuk-uy taythonglyeng
* 前 | [アメリカの大統領]

(35) 韓国語の語⁺複合語

- a. 일본인 [유명 (*한) 배우]
Ilpon'in [yummyeng (*-han) paywu]
日本人 [有名 (*な) 俳優]
- b. 하계 [깃다부 (*의) 영업시간]
hakyey [kkiktapu (*-uy) yeng'ep sikan]
夏季 | [喫茶部 (*の) 営業時間]

韓国語の状況はほとんど日本語と同じであり、「語⁺」の接頭辞も「語⁺」の複合語も存在する。

以上をまとめると、「語⁺」の接頭辞は中国語にも韓国語にも存在することから、これに当たる日本語の漢語接頭辞は中国語から（直接に、あるいは韓国語経由で）借用されたと考えられる。しかし、複合語についてはそれほど単純な話ではない。接頭辞が特定の形態素に限定されるのとは比べ、複合語というのは、特定の形態を借用することもあり得るが、それ以上に、複合化という抽象的な語形成過程（プロセス）が基本となる。しかも当該の複合語は中国語に存在しないと思われるので、「語⁺」のレベルで複合語を作るというプロセスは、日本語で（あるいは韓国語で）新たに創成されたものと捉えなければならない。とりわけ日本語（和語）では古来より複合が活発であるから、その抽象的な語形成過程を「語⁺」という形態単位に拡大することはさほど難しいことではなかったと推測できる。

3. 2. 統語的複合語：中国語にも韓国語にもなく、日本語独自

日本語に特徴的な複合語に、Shibatani and Kageyama (1988) でpost-syntactic compounds, 影山 (1993) でS構造複合語と呼ばれるものがある。(36) の矢印の右側で [] で囲んだ部分がそれに当たる。

- (36) a. 学生がエレベーターを使用のときは → 学生が [エレベーター | 使用] のときは
b. 飛行機が成田空港に着陸の際 → 飛行機が [成田空港 | 着陸] の際

- c. ビル火災が発生の場合は → [ビル火災 | 発生] の場合は
d. 本校生徒がバイクで通学の場合は → *本校生徒が [バイク | 通学] の場合は

この種の複合語が統語構造で産出されることは、その適用が格 (case) という統語的概念に依存していることから理解される。すなわち、この複合語の元になる文構造において、他動詞 (36a) の場合はヲ格目的語、動詞の直前にニ格補語を取る自動詞 (36b) の場合はそのニ格補語、そして、統語構造において動詞の直前に主語が来る非対格動詞 (36c) の場合は、そのガ格主語が漢語述語 (動詞的名詞、動名詞) に編入される。(36d) の「バイクで」のような付加詞は編入不可能である。

この複合語は「使用、到着」のような漢語動名詞を述語とする構文に限られ、和語が述語の場合には成立しない。

- (37) a. *学生が [エレベーター | 使う] のときは cf. 「使用」
b. *飛行機が [成田空港 | 着いた] 際 cf. 「到着」

このことから、統語的複合語は漢語の動名詞を主要部とする構造に限られることが分かる (ただし、述語は「[公園 | ジョギング] の際に」のように洋語にも拡張している)。

では、この統語的複合語は中国語から借用されたのだろうか。(38) を見ると、そうではないことが分かる。

- (38) a. 学生 使用 电梯 的 时候
学生 使用 エレベーター の とき
b. 学生 使用 教職員工専用 (?的) 电梯 的 时候
学生 使用 教職員用の エレベーター の とき
c. 学生 使用 或者 破坏 电梯 的 时候
学生 使用 または 破壊 エレベーター の とき
d. *学生 [电梯 使用] 的 时候
学生 [エレベーター 使用] の とき

(38a) の下線部は一見、複合語のように見えるが、実際は「語」になっていないことが句の介入 (38b, c) から証明される。なお、中国語の基本語順からして、(38d) も当然成り立たない。このような観察から、中国語には日本語の統語的複合語に当たるものは存在しないと考えてよいだろう。

ついでに、韓国語の状況を見ておこう。

- (39) a. 학생이 [엘리베이터 | 사용] 시에는 (他動詞の目的語)
haksayng-i [eyllibeyithe | sayong] si-ey-nun
学生が [エレベーター | 使用] 時には

- b. *엘리베이터를 [학생 | 사용] 시에는 (他動詞の主語は不可能)
 *eyllibeyithe-lul [haksayng | sayong] si-ey-nun
 *エレベーターを [学生 | 使用] 時には
- c. 비행기가 [나리타공항 | 착륙] 시에는 (場所格補語)
 pihayngki-ka [Nalithakonghang | chaklyuk] si-ey-nun
 飛行機が [成田空港 | 着陸] 時には
- d. 동경에서 [대지진 | 발생] 시에는 (非対格動詞の主語)
 Tongkyeng-eyse [taycicin | palsayng] si-ey-nun
 東京で [大地震 | 発生] 時には

(39) だけを見ると、韓国語は日本語と何ら違いがないように見える。ところが、これらの韓国語が本当に「統語構造」で形成されるのかどうかという点では疑問が生じる。

日本語で当該の複合語が「統語構造」から派生されると考える1つの重要な根拠は、その複合語に直接対応する文構造の存在である。すなわち、日本語では上掲(36)のように、複合語の元になる格標示構造(ガ, ヲ, ニを用いた統語構造)がある。このことから、日本語では統語構造に直接、複合語形成(incorporation)が適用すると考えてよい。ところが、韓国語では、元になるはずの格標示構造は不適格になる。

- (40) a. ?학생이 엘리베이터를 사용 시에는 (cf. 39a)
 ? haksayng-i eyllibeyithe-lul sayong si-ey-nun
 学生-が エレベーター-を 使用 時には
- b. ?비행기가 나리타공항에 착륙 시에는 (cf. 39c)
 ? pihayngki-ka Nalithakonghang-ey chaklyuk si-ey-nun
 飛行機-가 成田空港-に 着陸 時には
- c. ?동경에서 대지진이 발생 시에는 (cf. 39d)
 ? Tongkyeng-eyse taycicin-i palsayng si-ey-nun
 東京-で 大地震-가 発生 時には

(40) の韓国語例についての文法性判断は、ふだん日本語を用いることが多い韓国語母語話者に調査した結果で、いずれも「?」をつけているが、インフォーマントによると、このように格標示をつけた表現は「日本語をまねたもののようだ」と感じられるそうである。そうすると、(40) は日本語からの干渉を受けている可能性が高く、純粋な母語話者には非文法的と判断されると予想される。実際、(40) のような時間節ではなく、(41) のような名詞修飾の構造にすると、日本語ではヲ格標示(41a) が問題なく許されるのに対して、それに対応する韓国語(41b) では(日本在住の韓国語話者にとっても)対格標示が不可能である。

- (41) a. エレベーターを 使用の 学生は
b. *엘리베이터를 사용의 학생은
*eyllibeyithe-lul sayong-uy haksayng-un
c. [엘리베이터 사용] 의 학생은
[eyllibeyithe sayong]-uy haksayng-un
[エレベーター 使用] の 学生は

興味深いことに、韓国語では対格標示を伴う統語構造が不可能であっても、それと意味的に呼応する複合語 (41c) は成立するというのである。

このことから、(39a, c, d) や (41c) のような韓国語は、日本語の統語的複合語とは根本的な形成過程が異なり、統語構造から編入によって派生されるのではなく直接、名詞と述語の複合によって作られるという可能性が高い。そうすると、post-syntactic compounds なし S 構造複合語は、日本語独自のものであるという結論が導き出される。

他方、韓国語に関しては、なぜ、日本語と同じような漢語動名詞であっても、格標示を許さないのかという問題が新たに生じる。影山 (印刷中) では、同じように中国語から借用した動名詞 (Verbal Noun) であっても、日本語のレキシコンでは「複雑事象名詞」(格付与力があり、動詞的性格が強い) として取り入れ、他方、韓国語では「単純事象名詞」(格付与力がなく、純然たる名詞に近い) として取り入れたのではないかという推測を示唆している。

3. 3. 動作主複合語

最後に、前節で述べたタイプの複合語を補完するようなタイプの「動作主複合語」に触れておきたい。世界中の言語に共通して見られる普遍的法則として、「他動詞とその主語を複合させることはできない」という制約がある。この制約が正しいことは、既に (39b) で挙げた日本語と韓国語の例が非文法的であることから分かる。(42) に和語の例を付け加えておこう。

- (42) a. *[母親作り] のケーキ (cf. 手作りのケーキ)
b. *[夏目漱石書き] の手紙 (cf. 鉛筆書きの原稿)

他動詞主語 (外項) 排除の制約は種々の言語で確認されている。逆に言うと、他動詞主語を内部に含む複合語で、規則性、生産性のあるものは報告されていない (1つの例外はトルコ語 (Öztürk 2009) であるが、トルコ語については別の分析もあるようである: 栗林 2009)。

ところが、日本語では、次のように漢語他動詞と他動詞主語を自由に複合させることができる (詳細は影山 2006)。

- (43) a. [国語研究所 | 主催] のシンポジウム (= 国語研究所が主催)
b. [スピルバーグ監督 | 制作] の映画 (= スピルバーグ監督が制作)
c. [プロカメラマン | 撮影] のポートレート (= プロカメラマンが撮影)

これらも、語⁺接頭辞および統語的複合語と同じアクセント型を持ち、和語動詞には適用しない。

- (44) a. *[国語研究所 | 開き] のシンポジウム
b. *[スピルバーグ監督 | 作り] の映画

したがって、(43) タイプの複合語も、漢語の力によって成り立っていると考えてよい（この複合語形成も「[岡本太郎 | デザイン] のオブジェ」のように洋語動名詞に拡張している）。

では、このような動作主を含む複合語は中国語から借用されたのだろうか。調べてみると、中国語にはこのタイプの複合語は存在しないことが判明する。

- (45) a. 巴黎大学 主办 的 讲演会
パリ大学 主催 の 講演会
b. 斯皮尔伯格导演 拍摄 的 电影
スピルバーグ監督 撮影 の 映画
(46) a. 巴黎大学 2008年3月 主办 的 讲演会
*パリ大学 2008年3月に 主催 の 講演会
b. 斯皮尔伯格导演 竭尽全力 拍摄 的 电影
*スピルバーグ監督 一所懸命に 撮影 の 映画

(45) の下線部は日本語の複合語に対応するように見えるが、しかし (46) で形態的緊密性をテストすると、間に統語的な副詞を挿入することができるから、「語」になっていないことが明らかである。逆に、(46) の日本語は非文法的であるから、日本語の表現は実際に「語」であることが確認できる。

最後に、韓国語の事情に一言だけ触れておこう。韓国語には、日本語とそっくり同じと思われるものがある。

- (47) a. [大統領 | 主催] の パーティ
[대통령 | 주최] 의 파티
[Taythonglyeng | cwuchoy]-uy phathi
b. *[大統領 | 去年 | 主催] の パーティ
*[대통령 | 작년 | 주최] 의 파티
*[Taythonglyeng | caknyen | cwuchoy]-uy phathi

(47a) の [] 部分がそれであり、実際に複合語になっていることは (47b) で証明される。

しかし、ここでもまた、韓国語の特異性が指摘できる。すなわち、先に統語的複合語の議論で見たように韓国語の動名詞は項を格標示することができないが、同じ制約が動作主複合語にも働いていることが明らかになる。

- (48) a. * [스필버그감독이 제작]의 영화
 * *Suphilpekukamtok-i ceycak-uy yenghwa*
 スピルバーグ監督が 制作の 映画
 b. * [스필버그감독의 제작]의 영화
 * *Suphilpekukamtok-uy ceycak-uy yenghwa*
 スピルバーグ監督の 制作の 映画 (ガーノ変換)

(48a, b) の日本語が適格であるのに対して、対応する韓国語は非文法的である。

●まとめ 本節の内容を整理すると次のようになる。まず、「語⁺」の接頭辞は日本語だけでなく中国語、韓国語にも存在するから、これらは中国語に源を発し、日本語（および韓国語）に借用されたものと結論できる。日本語と韓国語は「語⁺」という形態単位を接頭辞だけでなく複合語にも拡大した。韓国語では統語的複合語と動作主複合語に相当する統語構造が非文法的であるから、これらの韓国語表現は、統語構造から派生されたのではなく、むしろレキシコンにおける「語⁺」の語形成によって作られたのではないかと推測することができる。

そうすると、残るのは、格標示を持つ統語構造に直接対応する日本語の統語的複合語と動作主複合語である。これに当たるものは中国語にも韓国語にも欠如しているから、まさしく、日本語独自のものと考えてよい。なぜ日本語がこのような特異な語形成を発達させたのか、逆に、韓国語ではなぜそれに当たるものが不可能なのか、といった疑問が湧いてくるが、それについては、より広範な調査と分析をしてから、別の機会に報告したい。

4. 結 び

本稿では「日本語は特殊か？」という問題に対して、一方では「特殊でない」という議論を示しながら、他方では「特殊だ」という論を展開した。しかしながら、この2つの結論は決して矛盾するわけではない。すなわち、母音の数や語順など、人間の認知的・生理的基盤に立脚すると思われる現象については、日本語はごく自然な方策をとっている。認知的・生理的に自然だということは、確率的にも、日本語は「多数派」に属することが予想され、その意味で、日本語は世界の中で「特殊ではない」と言える。

しかし、形態構造の単位、動詞的名詞の文法的扱い、複合語形成の適用レベルといった、認知的・生理的基盤と関係が薄い現象については、日本語独自の特異性が多く見つかる。もちろん、その特異性も、全体とすれば、決して人間言語として可能な枠から逸脱するも

のではない。今後の日本語研究は、日本語の「特殊な部分」、すなわち日本語の「特質」を発見すると共に、そのような特殊性が生じる理由を正確に解明することによって、日本語という一言語から普遍性、一般性のある理論を構築し、世界に発信していく必要がある。

参考文献

- Ackema, Peter and Ad Neeleman (2004) *Beyond morphology: Interface conditions on word formation*. Oxford: Oxford University Press.
- Benczes, Réka (2006) *Creative compounding in English: The semantics of metaphorical and metonymical noun-noun combinations*. Amsterdam: John Benjamins.
- Greenberg, Joseph (1966) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In: Joseph Greenberg (ed.) *Universals of language*, 73-113. (2nd ed.) Cambridge, MA: MIT Press.
- Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil and Bernard Comrie (eds.) (2005) *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press. 無料オンライン版 <http://wals.info/>
- Hawkins, John (1983) *Word order universals*. New York: Academic Press.
- Hawkins, John (1994) *A performance theory of order and constituency*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1997) *The architecture of the language faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (2009) Compounding in the parallel architecture and conceptual semantics. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.), 105-128.
- 影山太郎 (1985) 「世界のことは多様さと共通性—」, 藤田実・平田達治 (編) 『ことばの世界』 東京: 大修館書店.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 東京: くろしお出版.
- Kageyama, Taro (2001) Word plus: The intersection of words and phrases. In: Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara (eds.) *Issues in Japanese phonology and morphology*, 245-276. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』 東京: 岩波書店.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4(1): 22-37.
- 影山太郎 (2006) 「外項複合語と叙述のタイプ」, 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平』1-21. 東京: くろしお出版.
- Kageyama, Taro (2009a) *Isolate: Japanese*. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.), 512-526.
- 影山太郎 (2009b) 「外心構造における意味と形態のミスマッチ—「太っ腹」タイプの形容名詞」, 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』25-45. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2009c) 「語彙情報と結果述語のタイポロジー」, 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2009d) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.
- Kageyama, Taro (in press) Variation between endocentric and exocentric word structures. *Lingua*.
- 影山太郎 (印刷中) 「日本語形態論における漢語の特異性」, 大島弘子ほか (編) 『漢語の言語学』 東京: くろしお出版.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99.
- Kornfeld, Laura Malena (2009) IE, Romance: Spanish. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.), 436-452.
- 栗林 裕 (2009) 『チュルク語南西グループの構造と記述』 九州大学大学院人文科学研究院.
- Lieber, Rochelle (1992) Compounding in English. *Rivista di Linguistica* 4(1): 79-96.
- Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer (eds.) (2009) *The Oxford handbook of compounding*. Oxford: Oxford University Press.
- Öztürk, Balkız (2009) Incorporating agents. *Lingua* 119: 334-358.
- Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto (2009) The classification of compounds. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.), 34-53.
- Scalise, Sergio, Antonio Fábregas and Francesca Forza (2009) Exocentricity in compounding. *Gengo Kenkyu* 135: 49-84.

- 柴谷方良（1981）「日本語は特異な言語か？類型論から見た日本語」『言語』10(12)：46-58.
- Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) Word formation in a modular theory of grammar. *Language* 64 : 451-484.
- 塚本秀樹（1997）「語彙的な語形成と統語的な語形成—日本語と朝鮮語の対照研究」, 国立国語研究所（編）『日本語と外国語との対照研究Ⅳ：日本語と朝鮮語〈下巻〉』191-212. 東京：くろしお出版.
- 角田太作（1991/2009）『世界の言語と日本語』（改訂版）東京：くろしお出版.
- 山本秀樹（2003）『世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』広島：溪水社.

影山 太郎（かげやま・たろう）

国立国語研究所所長。1977年 南カリフォルニア大学大学院 Ph.D.

大阪大学助教授，関西学院大学教授等を経て，2009年10月から現職。

主要著書：『語彙の構造』（1980年，市河賞），『文法と語形成』（1993年，金田一京助博士記念賞），『動詞意味論』（1996年），『語形成と概念構造』（共著，1997年），『形態論と意味』（1999年），『動詞の意味と構文』（編著，2001年），『ケジメのない日本語』（2002年），『形容詞・副詞の意味と構文』（編著，2009年），『レキシコンフォーラムNo. 1～No. 5』（編著，2005-2010年）ほか。

社会活動：日本言語学会会長，日本語学会評議員，日本英語学会理事，言語系学会連合運営委員長ほか。